
ぼくのはび太くん

神田春希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくのものび太くん

【Nコード】

N0300I

【作者名】

神田春希

【あらすじ】

ぼくは久しぶりに未来にやってきた。妹のドラミに呼び出されたからだ。ドラミの用事って、なんだろう？のび太くんは「ゆっくりしてきていいよ」って言ってたけど、やっぱり心配だから用事が終わったらすぐ帰ろうか？

no.1 (前書き)

ドラえもんが今年で30周年だそうで、おめでたい限りです。
私自身物心付く前からドラえもんを見ていたこともあり、大好きな
作品のひとつです。

書いているうちにちょっと寂しい話になってしまいました。
つたない文章で恐縮ですが、もし宜しかったら読んで見てください。

「お兄ちゃん。」

急に呼び出してごめんなさいね」

妹のドラミがぼくの目の前に紅茶を出しながら言う。

今日はドラミに呼び出されて、久しぶりに未来の世界にやってきた。

未来の世界出身のぼくが「未来」というのは、ちょっと違和感があるような気もするけれど、

ぼくが未来で過ごした期間よりも、のび太くんのいる世界 現代のほうが長くいるから、

ぼくとしてはそのほうがしっくりとくる。

「別に平気だよ。」

未来新聞であらかじめ、のび太くんに危険がないか調べてきたし。

それに、のび太くんが『大丈夫だから』って言ってたし……」

ぼくはのび太くんを思い出し、ちよつと鼻がつんとなったので、ドラミに気が付かれないように、紅茶をすすった。

紅茶は現代にはない品種のもので、ぼくは未来の紅茶に少しどきりとする。

もし、急に現代に戻れなくなったら、ぼくはのび太くんのいないこの時代ですごさなければならぬのだろうか？

ぼくは何気なく窓の外を見る。

そこに見慣れた景色は無く、無機物の集合体のような建物が静かに佇んでいた。

「現代になじんでしまうと、ここはまるでSFの世界だよね」

ぼくは何の気なしにぼつりと呟いてしまった。
ドラミはぼくの眺めている方をちらりと見ると「そうね」とだけ言った。

「ねえ、お兄ちゃん。

そんなにのび太さんの事が好きなの？」

「え？」

ぼくは急な質問に驚いてドラミを見た。

兄であるぼくの目から見ても、かわいらしいドラミ。

そんなドラミが、先ほどまでの柔らかな笑顔ではなく、真剣な顔でぼくを見ている。

「うん。大好き」

ぼくも真剣に答えた。

ぼくは、のび太くんが好きだ。

もし、叶うなら、ぼくはのび太くんの傍にずっと、ずっといたい。
のび太くんの願いを叶えてあげたい。

喜ぶ顔を見たい。

「お兄ちゃん。よく聞いて。

私たちはロボット。のび太さんは人間よ。

お兄ちゃんがどんなにのび太さんのことを思っている、彼はすぐ大人になるわ。

そうしたら わたしたち子守ロボットは、役目を終えるしかないのよ」

ドラミの声がとても冷たく、冷酷なものに感じられた。

「それは ドラミだってそうじゃないか！

ドラミはセワシくんの子守ロボットだろ？」

ぼくは少し声を荒げて反論した。

子守ロボットの役目は、対象者が子供であればこそ、だ。

そんなのは重々承知している……。

いや、目をそむけていたのかもしれない。

だから、今ドラマに言われたことで、ムキになって反論してしまっているのだから

「ご、ごめん。」

ちよつと言い過ぎた」

「ううん。」

わたしも、配慮がたりなかったわ」

ぼくたちロボットは何かしらの役目を背負って、この世に誕生してくる。

世界に必要な歯車の一部として。

ぼくたちを作った研究者は、ぼくたちに『心』まで付けてくれた。心は研究段階だったらしいけど、そのお陰でぼくやドラマのような子守ロボットというロボットも世の中に出てくるようになった。心があると、子供の子守をするのに最適なんだそうだ。

いくなれば母性とか父性とか。そう言った『家族的な愛情』をインプットするときに、心はかなり重要な役割を果たすらしい。らしいと言っるのは、僕自身よく分かってないから。

ぼくは他の人によってインプットされたからのび太くんと一緒にいるわけじゃない。

ぼくはのび太くんが好きだから居るんだ。

決してぼくは操られてなんて、いない。

実際、ぼくはインプットされていないはず、だ。

「お兄ちゃん。」

わたし、気になっていたことがあって。

それで、今回お兄ちゃんが未来に来てもらったの。

ちよっと前にお兄ちゃんが未来に帰ってくるって話あったわよね。

もう、のび太さんのところには戻れなくなるって……。

実際あの時、帰ってきたけど、急に『のび太さんの子守ロボットなんだからちゃんと子守をして来なさい』って言われて返されたですよ？

未だにあれが分からなくて……。

だって、タイムパトロールに過去に行っただけじゃないって言われてたのに、急に行ってこいなんておかしいじゃない」

確かに、普通なら考えられないことだ。

ぼくはあの時、二度とのび太くんのいる現代に戻ってはいけないうときつく言われた。

そして、もう一度禁を犯せば、大罪になるとまで言われたのだ。

もし過去に行けばのび太くんにまで、罪は及ぶって言われて、ぼくは毎日毎日悲しくて抜け殻のようになってた。

実際何もする気が起きなくて、ドラミには迷惑をかけた。

尻尾のスイッチを切ることもしばしばあって、ドラミはいつも悲しそうにぼくの尻尾を引っ張って起動する。

もうぼくは起動しなくてもいいのに。

のび太くんのいない世界にぼくが居ても、なんの意味もないのだから。

そんなある日。

ドラミはぼくの顔を見て泣きながら言った。

「お兄ちゃん！ のび太さんのところに、行ってもいいって！」

戻れるんだよ！？ お兄ちゃん！！」

ぼくは狐につままれたような気持ちで、とりあえず風呂敷を担いでタイムマシンに乗った。

今考えると、荷物は四次元ポケットに入ればよかったんだけど、あまりの事に気が動転してたんだ。

ぼくがタイムマシンから降りると、のび太くんが鼻水と涙を流しながら

「ドラえもんはもう絶対こっちにこないんだ！！」って叫んでたっけ。

ぼくは嬉しくて、この『嘘』を本当にしたくて、そつとのび太くんに説明したんだっけ。

「ドラミ。あれはね、本当に偶然だったんだ。

のび太くんに『どうしても困ったことがあったら使って』と言って置いていった箱があつてね。

状況によって出てくる道具は変わるから、実際何が出るかはぼくも知らなかったんだよ。

それをのび太くんが使ったとき、偶然言っただ。

ドラえもんはもう絶対こっちに来ない。会えるわけじゃないかい！！　って」

ぼくは少し冷めた紅茶を一口飲む。

「お兄ちゃん、その道具って……」

「ウソ８００（エイトオーオー）だよ。

あの道具は強く思えば思うほど本当になるから、だから帰ってこれたんだ。

ぼくは本当に嬉しかったんだよ。

のび太くんがぼくのことを本当に大事に思っていたって分かったから」

「そう。

なら安心したわ！」

ドラミの顔が急にぱつと明るくなった。

「わたし、本当に心配してたのよ。」

また未来に帰ってこいって言われるんじゃないかとか、やっぱり罪は償わなければならないうっていわれるんじゃないかって冷や冷やしてたんだもん。

そういうことは、ちゃんと言ってくれなくちゃ！」

そういうとドラミは「あ、お茶菓子忘れてたわ」といって、かるやかに台所に向かった。

そうだね。

ぼく、ドラミに心配かけてばかりだからね。

ちゃんと言えよよかった。

でも、なんとなくぼくの心に、そつとしまっておきたかったのも事実で。

言ってしまったら、消えてしまいそうな気がして言えなかったんだ。

ごめんねドラミ。心配かけて。

「お兄ちゃん！」

見てみて！　どら焼き買ってきてるんだから！

大好物なんですよ？

それと、しぶーい日本茶も用意してるのよ」

ドラミはウインクして、ぼくにお皿いっぱいのだら焼きを持ってきてくれた。

お、おいしそう！

絶妙な焼き加減。あんこの上品な匂い。

お！　もち入りのまであるじゃないか！

ぼくは思わずだれをたらしてしまい、慌てて手で拭いた。

いかにいかに。これ以上兄としての威厳を崩さないようにしなくては。

そう思っていると、ドラミは、これまたお皿にいっぱいメロンパンを持ってきた。

「こっちはわたしのね」

そう言ってぼくの目の前に座る。

「今日はもう暗い話はナシ、ナシ！
あっちの時代のお話聞かせてね！！
ね、お兄ちゃん」

にこにこ笑うドラミは、ぱくつとメロンパンをかじる。
ぼくもどら焼きをぱくりと食べて、いろんな話をした。
のび太くんの話が中心だけど。

ねえ、のび太くん？

ぼくは君に会えて幸せだよ？

もし、のび太くんが大人になって、ぼくのことを必要としなくなったら。

そうしたら、ぼくの寝ているうちに、そつとぼくの尻尾を引っ張ってね。

ぼく、もう辛くて寂しい思いをするのは、嫌だから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0300i/>

ばくののび太くん

2010年10月10日14時23分発行